

人間形成の可能性を求めて

I はじめに

今回の訓練生に関する調査で特に私の脳裏に強く焼きついた印象や、深く考えさせられた事を書き綴ってみたい。同時に多忙な中を我々の調査に御援助下さった先生方に対し、紙上を借りて御礼を申し述べたいと思います。

II 残念に思ったこと

ある総高訓で知能テストを始めた時である。2、3人の先生と私がテスト用紙を配り終え、私が「でわこれから説明しますので良く聞いて下さい」と言った時、突然にX先生が非常にきつい語調で、次のように注意された。

「いか良く聞いとけよ！お前達はバカばかりだから成績が悪い。説明を聞きそこなえばますます悪くなるぞ！」

田舎の意識感情としては普通に話しておられるのかも知れないが、私には痛く響いた。

このように生徒を馬鹿呼ばわりすることは残念ながら時々聞くことがあるが、このような発言のし方では何ら事態の解決策にならないのではなからうか。そのように言われる裏には、知能が低いので即人間的価値も低いのだ、という考え方を持っておられるのではないかと一寸気になったのである。

勿論この件だけをとらえX先生を非難するつもりは毛頭ない。毎日の教育訓練に厳しく当っておられ、訓練生が少しでも良くなって欲しいという強い願望からあのような言葉が出たのだろうと思う。

しかし、訓練生も1人の人間であることに変わりはなく、その人格を尊重し生徒に接することがまず必要と考える。

この総高訓の昨年の調査結果では、知能点は全国平均より低くはあった。

しかし、その総高訓の生徒達に私がテストを行った2日間の印象では、実に淳朴であり、他の総高訓で見られなかった真剣さがあり、テスト終了後にそれをほめたほどであった。

III Y先生のこと

A 総高訓へ10数名の卒業生を送り込んでいるa中学を、Y先生と2人で

訪ね、中学の先生達と意見を交えた。中学の先生達が最も強調されている事は、総高訓に進んだ生徒達は皆自分から希望して行ったという事であった。

Y先生と中学の先生の会話を聞いていて、Y先生の生徒に対する鋭い観察と暖かい指導は、中学の先生のそれよりはるかに優れていると思った。

家庭訪問もよくされているようで、家庭の生活状況や両親の教育観もよく理解した上で教育訓練に当っておられるという感じを受けたのである。

その中で、私が最も驚いたのは、1年間も担任していた教師が、ある自分の教え子の一方の腕が少しマヒして思うように動かせないということに気が付かなかったと言われた時である。最初に中学教師は進路決定に生徒の自主性を重んじた事を強調したが、このように教師が個々の生徒の個性や特徴を把握せずに、生徒の希望で進路を決定させても、私に言わせれば放任でしかない。その時の私の気持は、中学校の進路指導の欠陥、いや現在の教育の恥部を見通したという憤慨でいっぱいであった。

知能も優れ、学力も勝る生徒に対する必要以上の指導と、反面それらに劣る生徒達が教室の隅で教師の目にとまらないように静かに耐えている光景を思い浮べたのである。

事実、訓練校に入って来ている生徒達は上のように、中学教師に見放された生徒達が大部分であるようだ。このような中で、最初に書いたX先生がどなる気持もわかるし、それだけ訓練校の先生方の指導が重かつ大であるだろう。物覚えの良くない生徒に、実技だけでも一人前になってもらおうと、何度も何度もどなりながらも指導されている先生方の姿が目には浮かぶのである。

そのように必要以上の神経と労力を使い実技指導を行ないながら、実質的に高校教師の約3倍の受け持ちカリキュラムを消化し、その上更にY先生程の努力を要求するのは無理であろう。むしろX先生のような発言がよくわかるような気がした。

IV 技能連携高校での事

A 総高訓の生徒が多数、夜間通学していて技能連携校である、いわゆる「定通専門」のb高校を訪問した。

A 総高訓の生徒が入っている機械科に関して主な特徴を上げれば、

1. 入学資格者は機械加工又は機械設備に従事している者に限るということ
2. 1週に夜間（4時限）3日、他に全日登校（8時限）が1日（総高訓生は夜間4日登校）

これらの他に、総高訓生は1、2年時、特別なクラスがつくられ総高訓での訓練終了時間に合せて他の組より1時限早く始まり（0時限と呼ぶ）1時限早く終るよう便宜が計られている。又、3、4年生はクラスとしては一般の工場より通学している生徒達と同じであるが、特定の科目では別々に授業を行なっているとの事である。

これらのb高校教師の、カリキュラム編成等の配慮や御苦勞に反し、総高訓生に対する先生方の評価はあまりよくないのである。

つまり、1、2年生の総高訓組は他の組に比べ成績、品行とも悪く、授業態度も劣り、総高訓として一見まとまっているようで総高訓の各科ごとのセクトが強く出て協調性がなくまとまっていないう。そして次のような事があると指摘された。

「他のクラスでは全くと言えるほどないことですが、遅刻をした生徒の給食がなくなり、遅れて来た生徒が食べられない、ということが何度かありました。」

このように総高訓生が他の生徒より劣る原因として、「知能が劣るためだろう」と言われた。調べてみると確かに知能点は劣っているが、多少の知能差で人を見比べて優劣をつけることは出来ぬと思う。

又、別の理由として、総高訓生はただ就職の条件をよくするために通学してくるからではなからうか、とも言われたが、これとて的確でない。最近の求人難を反映し、新聞広告の求人欄の「但し定時制高校卒業者は除く」という一文は目につかなくなったが、まだまだ学歴が問題になる社会である。

総高訓生も工場で働く青年も向学心に燃え、学歴社会の波を乗りきろうとする考えには差はないのではなからうか。

このようなあまり嬉しくないことばかり聞かされている時、私の心をさわやかにしてくれた小さな事があった。2日目再度b高校を訪問し私が玄関でスリッパに履き替えた時、廊下を小走りに急いでいた1人の生徒が私の前で立止まり、「今晚は〆」と元気に挨拶してくれた。多分A総高訓の

生徒だろう。トレーニングシャツとパンツを着ていたので、「今晚は、今から体育ですか？」と聞くと「ハイ♪」とニコリ笑いながら答え体育館の方へ走り去った。時間がなく、総高訓1年生のクラスは、バスケットボールを練習している体育の授業を参観しただけで、生徒達と話し合えなかったのが残念であった。

2年総高訓組を参観した、丁度授業が終えようとしていた。打解けた雰囲気を作りたいと思い教壇には立たず生徒の机の所で色々と話しかけてみた。しかし、なかなかクラスの雰囲気には溶け込めない。自分がだんだんあせってくるのがよくわかる。10何分かの短かい時間ではあったが、その数倍の時間であったように感じ、背中にぐっしりと汗をかいて教室を出た。「今日はまだ静かで良い方ですよ、先生に遠慮していたのではないですか」と付き添って来てくれた若い先生が言われたが、私にはそうは思えなかった。なぜもっとお互いに気持ちを打ち解けて話し合えなかったのだろうか、私の態度、話し方が悪かったのか、今考えても今回の調査で最も苦い思い出である。

b高校の先生達は次のようにも指摘した。「1、2年生時には色々と悪い点が目につきますが、総高訓を卒業し、就職してからの3、4年生は全く別人のようになり、クラスの空気ががらりと変わります。」

そのように変化する理由として、「経済的自立のために、責任感や社会人となった自覚を持つようになるのでしょいかね」と言っておられた。

総高訓を卒業し、続けてb高校へ通っている3、4年生が、隣り合せの製図室で10数名づつ製図の授業をしていた。両方とも石油ストーブが燃えるポーという低い炎の音以外に私語1つない実に静かな教室である。

製図だから当然な状況かも知れないが。時折、手を上げて質問する生徒に、先生の指導する声が低く聞こえる。1人1人の製図台の横を回って質問してみる。ほとんどの者が昼働き夜学ぶ毎日に苦痛を感じていない。現在勤めている企業に不満を持つものはなく、中には進学の希望を持っている者もいたが、高校卒業後すぐ職を変えたいとする者はいない。

しかし、全体的にみて、卒業後4、5年でほとんどの者が転企業していることが判った。

高校側としても、生徒の全日登校の便宜やその他の援助を受けている手前、卒業後早期に離転職することは、頭痛の種とのことである。話はそれだが、この2つのクラスの生徒達は、ある目的を自分なりに持ち、その達成の為毎日の苦しみを苦しみと感ぜず、夜の蛍光灯の下で学んでいるように思われた。何人かの生徒が、総高訓を出たことに、「他の人達よりある種の自負心が持てる」といった言葉には自信が感じられた。

このような1、2年生と3、4年生の差はどのような要因によるものか。これは技能連携の長所なのか短所なのか、又はここだけの特殊性か。今後職業訓練や技能連携を考えてゆくのにどのような意味があるのだろうか。

最後に2年生の一般の組を訪ねた。数学の三角函数の授業である。授業中の姿勢は我々からみると多少悪いが、積極的に質問したり、先生の質問にも間違っても答えるなど活発に臨んでいた。

授業後話し合ったが、帰宅時間は過ぎているのに、皆私の質問に気持よく答えてくれた。皆「学校に来るのが一番の楽しみだ」という。「あと2年以上ありますが、やり通せますか?」「ハイ、必らずやり通したいです」と元気の返事が皆から返ってきた。「あまり遅くなってはいけないので、この辺で、どうも有り難とう、元気で頑張ってくださいね、さよなら」「サイナラ!」と挨拶をかわして教室を出た。

もう一つ、私が気になつたb高校の先生の指摘がある。それは、「総高訓生は自主的に学ぼうとする態度が全くない」という。「高校では出来るだけ生徒自身が自らの意志で学ぼうという心構えになるよう教育指導しているが、そのような態度は全くみられない。やはり訓練校での半強制的つめ込み指導法による影響でしょうかね。勿論、2ケ年という短い期間で1人前に仕上げるのは、そういう方法しかないのでしょうか……。」この意見を聞いた時、「やはり訓練では人間も人間らしく育てるといことが出来ぬのだろうか」と強いショックを受けた。しかし、そのような先生方の意見に対し、当の本人達、総高訓卒業のある4年生は、「指導方法ではやはり訓練所の先生のやりかたが良い。厳しく作業に責任感が出、気持が緊張しますね。ここの先生のはなまぬるくて……。」と。だが、

1、2年生の日常の学習態度等が悪いのは事実のようである。このように総高訓生が悪評を買う原因はどこにあるのだろうか。

帰京して他の研究員といろいろと話し合ってみた。その結果、だいたい次の3点にまとめられた。

まず第1点は、毎日の教育訓練が、訓練校と定時制との2重の負担となり、生徒達にオーバーロードとなっているという事である。

学校教育法の改正理由の趣旨は、勤労青少年の学習負担の軽減にあったが、これが有効に働いていないと言えるのではなからうか。

第2点は、やはり学校教育法改正の趣旨である、昼夜ほぼ同様の教育を受ける生徒の2重負担を避ける、という点も効を奏してなく、特に訓練校の生徒に対しては精神的圧迫が昼夜を問わず同質であることだ。訓練校と高校では多少の内容の差はあれ、注入法あるいは開発法であれ、教育訓練を行う「場」であることには相違ない。自発的に学ばせようとする指導は、少し誤れば放任的となる。総高訓の訓練で疲れた体を休めるように自然と授業に消極的となり、自主性がないように見えるのではなからうか。

一方工場等から来ている生徒は、全く昼夜で環境が違ふ。両方の生徒達ともオーバーロードに変わりはないはずだ。

しかし、職場から通学してくる場合、新鮮な気持ちで校門をくぐる「何か」があるのではなからうか。

第3点は、b高校に配慮してもらっている総高訓組という特別なクラスのために、自分の周囲の顔振れが訓練校と全く同じで新鮮味が感じられず、気持ちの切り替えができないのではないかということである。意識の進んだ生徒が定時制を退めてゆく理由として、「学校の雰囲気（雰囲気）が全くない。高校に来ていては気持ちになれない」という者がいるそうだが、これを裏づけていると思う。

他に、総高訓の生徒は、1、2年生時点で意外に高卒の資格を取るといふような明確な目的意識が薄いそうであるが、これも1つの原因となっているように思われる。

こうしてみると、高校の先生方の努力や御苦労の割に技能連携は生徒達には苦しい毎日のルーチンでしかないのではないだろうか。厳しい訓練をものともせず、人並み外れた苦難に耐え、それを苦しみと感ぜず、又友の誘惑に負けず、あまり高尚な理想を追わず、昼夜の教育訓練を自分に定め

られた「天命」というような自覚でやり通さねばならぬという、まさに超人的能力を要求される「苦学制度」のように思われてならない。「～しながら学べる」という甘い誘い、又は向学心に燃えて入学した生徒達は、1年目に大半が退め、2年目に更に半分ぐらいになり、残っている生徒はまさにそのような者ばかりのように感じられた。このように中途退校者の多い事実をどう解決すればよいか。問題は一度は向学心に燃えて入ってきた青少年が退めていく原因を何ら解決することなく、又次年度の定員確保の為に教師がかけずり回るといふ現象は、何か職業訓練校の現状と似ているように感じた。

このように技能連携は訓練生に魅力を100%与え得るものでなく、ましてやこの制度で職業訓練が生き永らえることもむずかしいだろうと考えざるを得なかった。

これを知ってか、最近労働省は文部省に、義成訓練課程に対し高卒資格を与えるようにと折衝中との事であるが、高校進学率が83%の今日ではこれとて遅きに失したと言えないだろうか。

今必要なのは、小手先だけの改でなく、まず職業訓練の理念の確立と、そのもとに一大改革が望まれる時期ではないだろうか。いや職業訓練を云々するために理念の確立はできぬのであり、教育の一環としてとらえてこそ始めて達成できるのかも知れない。

技能連携を批判することで終始したが、これに対し次のような反論もあることだろう。「3、4年生は皆明るく希望を持って目的達成に励んでいるではないか。極く少数でもそのような制度の恩典を受けられる者がいれば、それだけでも成功ではないか」と。

V ある人生論

B県庁の訓練課・教育委員会での調査を最後に、一路東京への列車に乗り込んだ。車中A総高訓の1年生に書いてもらった「卒業後の人生」についての作文をめぐっていた。皆自分なりに生活設計をしていることに感心したりその具体性に驚ろかされたりした。彼等の今後の人生にとって幸多かれと祈りながら…。

その中には私達が真剣に考え、明確な解答を出してやらねばならないと思ったいくつかの作文があった。職業訓練の場にいる私達は往々にして一つの殻に閉じこもり、その中だけを論じがちになるが、私自身、反省させられた作文であった。その中の2編を選び、原文のまま紹介してこの報告を終りたいと思います。

1. M君の作文

わいらは人間の一生について考えた事がない。でもこの機会にちよっと考えた。人間の一生とはつまらないものだと思う。生れてから小学校、中学校、高校または大学へと進み、就職しその職場で一生どろまみれになって働らいて、一生を終る。これが今の50代だと思う。

今の若いものは、点々と職を変わってゆく。でもその職を覚えればそれでいいと思うが、めったにそういうことはない。だから人生とは個人、個人の性格と頭脳とは切っても切れないものだと思う

だから人生とは、個人、個人の性格と頭脳できるものだと思う。でもぼくの意見としては、人間一生が、自分の性格と頭脳だけで、人間の一生が決ってはいけないと思う。

2. N君の作文

人間の命は短かいものです。また人間の心は小さいものです。そしてその短い命は、かけがえのないものです。その短い人生の中で、働くことが人間の根生を支えている。それが短い人生を送る、ゆういぎな生活であると思う。またその職業も自分に一番適した仕事を選び出して、その職業を実際にやることができれば、最高の人生だと思う。

人間は生れてきたからには、だれでも大きくなればこういうことをしたいと思う。しかし、世の中には、自分の知能によって、将来進む進路も大きく別けられる。それは小さい時からの希望がかなった人もいるだろう。またそれと反対に、希望もこの世間の大きな壁でとざされて、がっかりしている人もいる。それはその中には、自分の希望を実現させるには、いっしょうけん命に勉強した人、また全然勉強しないで遊びくさっていた人もいる。勉強してもその進路のとりあいでまけた人もいる。